

## 対話的実践が児童の学力に与える影響 —低学年における対話的実践の効果の検討—

丹羽さかの（東京家政学院大学 現代生活学部 准教授）

平成29年小学校学習指導要領が改訂され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業実践を改善する取り組みが求められるようになった。アクティブ・ラーニングの基礎となる対話する力、伝え合う力は、就学前の幼児教育においてその基礎が育まれ、その力を土台として小学校入学後に「伝える・聞く力」が育っていくという、育ちの連続性、学びの連続性がある。だが実際には、この連続性が分断され、幼児期に育まれた力が1年生の教室で十分に発揮されていないことが指摘されている。この原因の一つに、小学校の教師が、子どもが入学までに身に付けている力について正しく把握せず、その力を発揮させ活かすような指導を行っていないことがあると考えられる。今回の研究では、1年生の教室での授業改善により、就学までに育ってきた「伝え合う力」が発揮されるようになると、対話的な実践・学びが早い時期から成立するようになり、児童の学力が高まるという仮説の検証を行った。また、その他の学力に影響すると考えられる要因についても取りあげ関連を検討した。

**【研究1】小学校での対話的実践と低学年児童の学力の検討**

平成28年度から幼保小接続の取り組みを始め、平成29年度にアプローチカリキュラム実施、平成30年度にスタートカリキュラムの実践を行ったS県Y町の学力調査データを用い、幼児期と児童期の学びをつなぐ幼保小接続の取組前と取組後で、1年生の学力に変化があるかどうかを検討することで、上記仮説の検証を行った（分析1）。また、授業実践の変化を確かめるために、1年生担任教師へのヒアリングを行った（分析2）。さらに、対話的実践の量と学力との関連の検討を行った（分析3）。

■分析1 現1年生から現6年生の各学年1年次の学力調査得点（国語・算数）の平均値を比較したところ、国語、算数とも学年による平均得点の違いが見られた。国語では現3年生（平成29年度入学）が最も高く、現4、6年生が最も低い（図1）。算数では現2、3年生（平成30年度入学）が最も高く、次に現1、5年生、6年生の順で、最も低いのが現4年生であることが分かった。

■分析2 Y町立の3小学校の1年生担任教諭8名（A小3名、B小2名、C小3名）を対象に、平成29,30年度以前と以降で子どもの姿の捉え方や授業・学級経営に変化があったかどうかヒアリングを行った。Y町の幼保小接続の取り組みが始まったことにより、教師は幼児教育や幼児期の子どもたちの学びや育ち、また幼児期から児童期へのつながりについての理解を深め、子どもの姿の捉え方を変化させたこと、それがさらに、幼児期に育ってきた力を意識し、それを発揮させることを意識した指導を行うという授業実践の変化につながったことが示唆された。

■分析3 各クラスの担任教師に、月曜日から金曜日の各授業の中で、対話的実践を行った時間数を教科名とともに一コマずつ記入する「対話的実践記入シート」への記入を求めた。返送のあった1年生の3クラスについて学力調査得点（国語・算数）の平均値の差の検定を行ったところ、国語、算数とも対話的実践の時間数が一番多いクラスが他のクラスより平均得点が高い傾向にあることが分かった。

■考察：Y町では、幼保小接続の取り組みにより小学校教師の幼児教育、幼児期の育ちに関する理解が深まったことで授業実践が幼児期に育かれた力を発揮させる指導へと変化し、児童の学力が高まった可能性が示唆された。

**【研究2】児童の学習に関する意識、幼児教育・保育の特徴、家庭環境と学力の関連**

児童の学力に影響するその他の要因として3つを取りあげ、関連を検討した。

■児童の学習に関する意識：「学習を定着させる行動」、「学習に向かう基本的な姿勢」、「学習の楽しさ」、「本や新聞を読むこと」、「1カ月あたりの読書量」と学力の関連が見られた。

■幼児教育・保育の特徴：園の物理的言語的環境、保育者の言語環境に関する意識を取りあげ学力との関連を検討したが、関連は見いだせなかった。

■家庭環境と学力の関連：両親の学歴や「本や新聞を読むようにすすめる」という子どもへのかかわりと学力の関連が見られた。

【成果と今後の課題】今回得られた結果は、1年生の教室での子どもたちへのかかわりや、授業実践の改善に活かしていくことができるものである。今後は、小学校、幼稚園・保育所での対話的実践そのものを取りあげ、さらに仮説を検証することが必要である。（共同研究者：荒牧美佐子 目白大学、三輪洋士 榛原郡吉田町学校教育課）